

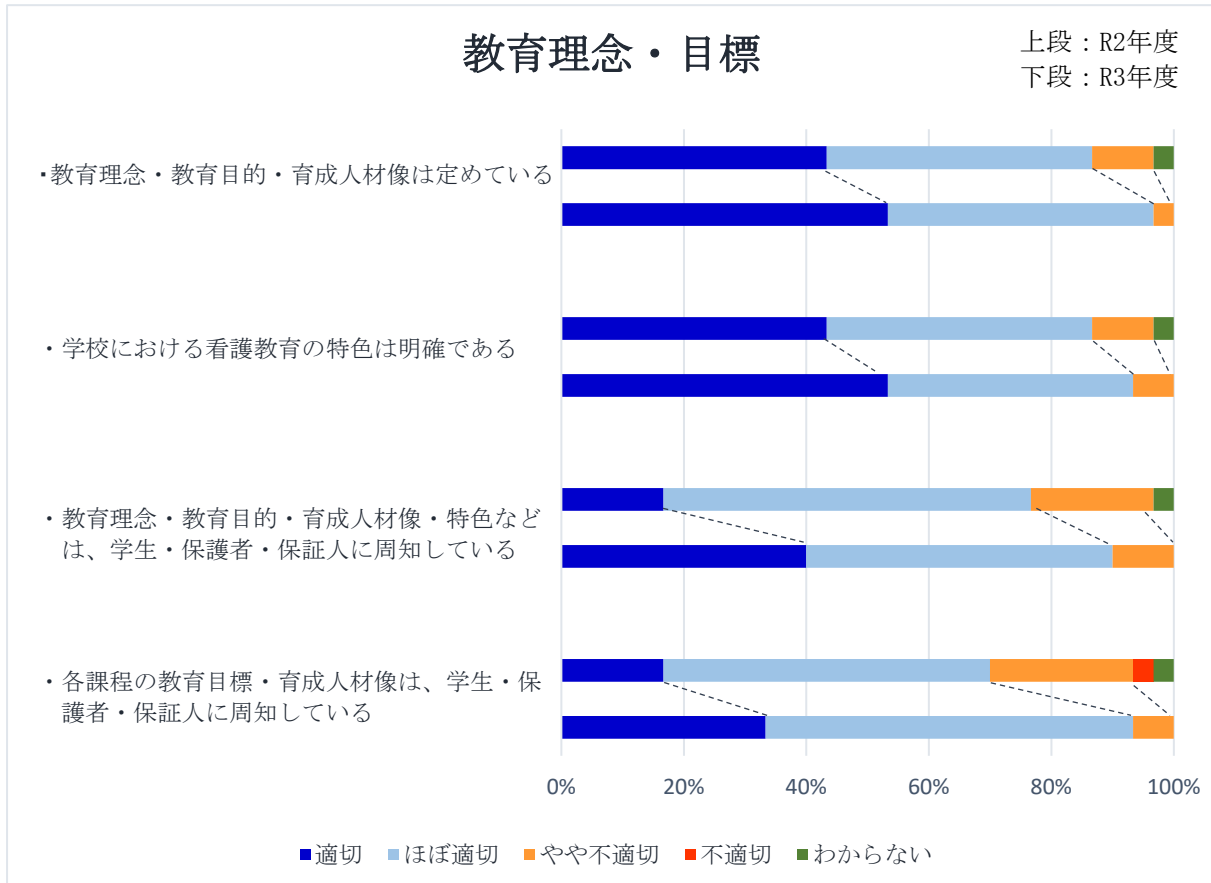
京都府医師会看護専門学校

令和3年度 自己点検・自己評価

I. 教育理念・教育目標・人材育成

N=30

(1) 教育理念・目標



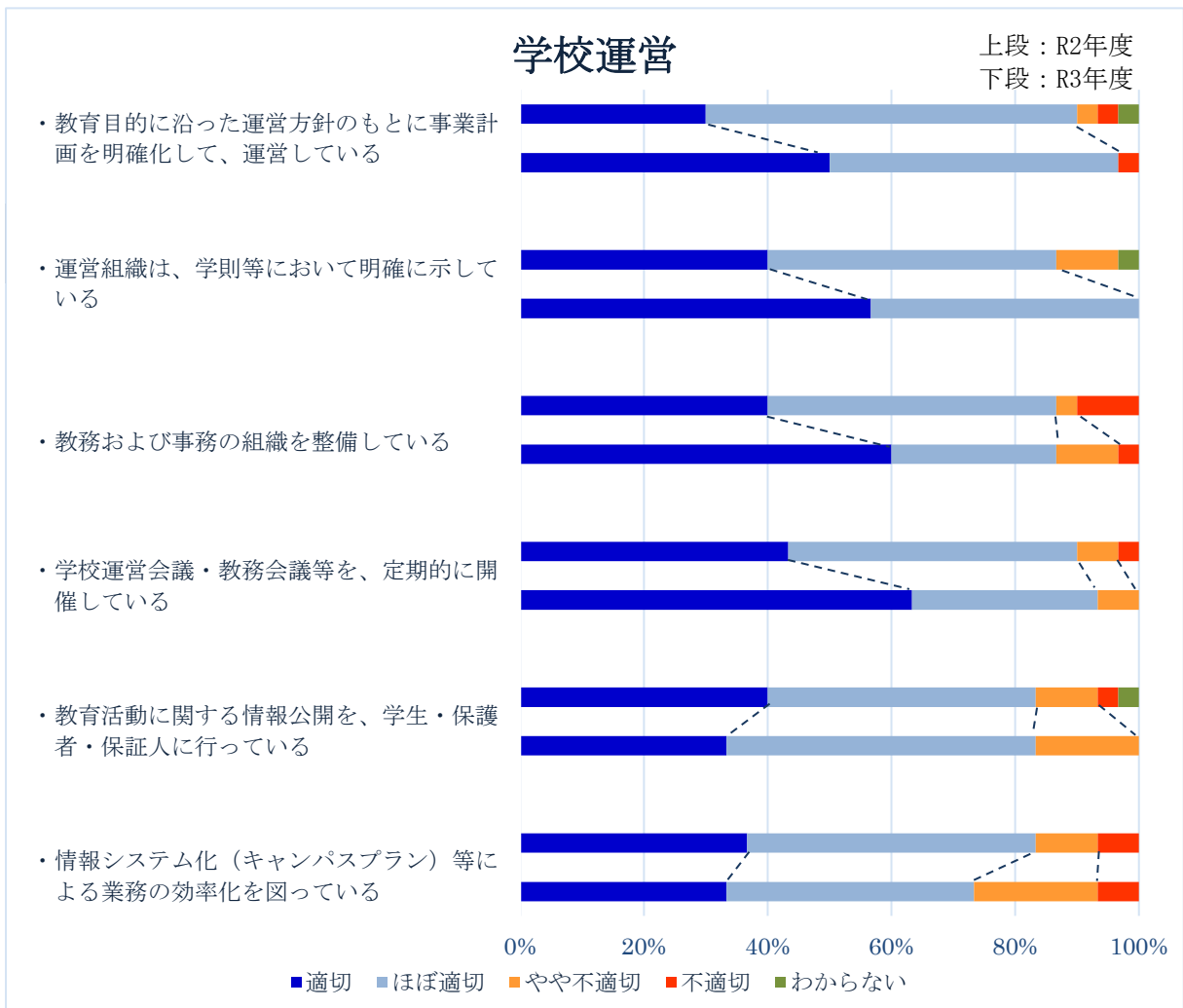
校内評価	外部評価
<p>教育理念・目標については、全項目「適切」「ほぼ適切」が増加した。なかでも、「教育理念・特色などを学生や保護者に周知しているか」については、昨年度より2倍近く「適切」が増加している。これは次年度から始まるカリキュラム改正に向けて、教職員一人ひとりが十分に熟知した上で、学校教育に携わっている所以だと考える。また、昨年度、僅かではあるが「不適切」と回答した「各課程の教育目標等の周知」においても、「適切」「ほぼ適切」を併せ70%が95%と漸進している。新型コロナウイルス感染症の弊害はあるものの、教職員の意識改革と教育実践の賜物であると評価できる。</p> <p>次年度は、いよいよ新カリキュラムが始動するが、本校の教育理念・目標に則り、人材育成に努めていきたい。</p>	<p>教育理念、教育目標等について適切に定められており、且つ、学生、保護者、保証人に周知されていることがわかる。特に昨年度から比較しても、「不適切」が皆無であることはその努力の成果と思われる。</p> <p>教育理念・目標、全項目「適切」「ほぼ適切」の増加は、意識して取り組まれた成果であると思います。「教育理念・特色などを学生や保護者に周知しているか」「各課程の教育目標等の周知」どの項目も、「わからない」の回答がない事も意識しながら取り組まれた大きな成果であると思います。これまでの取り組みを継続しながら新カリキュラムの始動に向けて活動頂きたいと思います。</p> <p>カリキュラムの改正に向けて、教職員の皆さんが取り組んで頂いた成果</p>

が表れている。医師会看護専門学校の他の学校にないカラー（特色）を出して頂きたい。

教育理念・目標については、「適切」「ほぼ適切」が増えている。「各課程の教育目標・育成人材像は、学生・保護者に周知している」については、昨年度は不適切との結果があるが、本年度には不適切とするネガティブな回答はないことから、教員の方々の意識の変化や働きかけが、学生・保護者・保証人への周知へと繋がったと考える。

II 組織運営

(1) 学校運営



校内評価	外部評価
<p>学校運営については、「教育目的に沿った運営方針」、「学則に基づく運営の明確化」、「組織の整備」、「定期的な会議の開催」は「適切」「ほぼ適切」が昨年度よりも増加した。なかでも、「学則の明確化」については、</p>	<p>教育理念、教育目標等を適切に定めた上、運営面においてもより明確にしている旨の結果は、理想的であるといえる。今後、情報システム化等による</p>

「適切」「ほぼ適切」が100%となった。これは、新型コロナウイルス感染症に伴い、学校教育の柔軟性が求められる中、一貫した教育のあり方として、教職員が学則に触れる機会も多くなり、十分な認識がなされた結果だと言える。「教育活動の情報公開」に関しては、「適切」は7%減少したものの「ほぼ適切」を併せると昨年度と横ばいである。今年度も保証人会の開催ができなかったことが要因である。一方、「情報システムによる業務の効率化」については、「不適切」「やや不適切」が27%と昨年度より10%高くなった。これは、入力作業に時間を要し、効率的でないことが要因と考えられる。

次年度は、教員及び事務組織の連携を密にし、教員の事務作業負担を軽減することにより学生と関わる時間を生み出し、教育に力を注ぐことができる環境を整えていく。また、課題とされる出欠管理、成績管理等の大幅なシステムの見直しも検討する。さらに、職員の「働き方改革」に応じた多様で柔軟な働き方を導入することで、職員の生活やプライベートを守りながら健全な学校運営が行えるように努める。

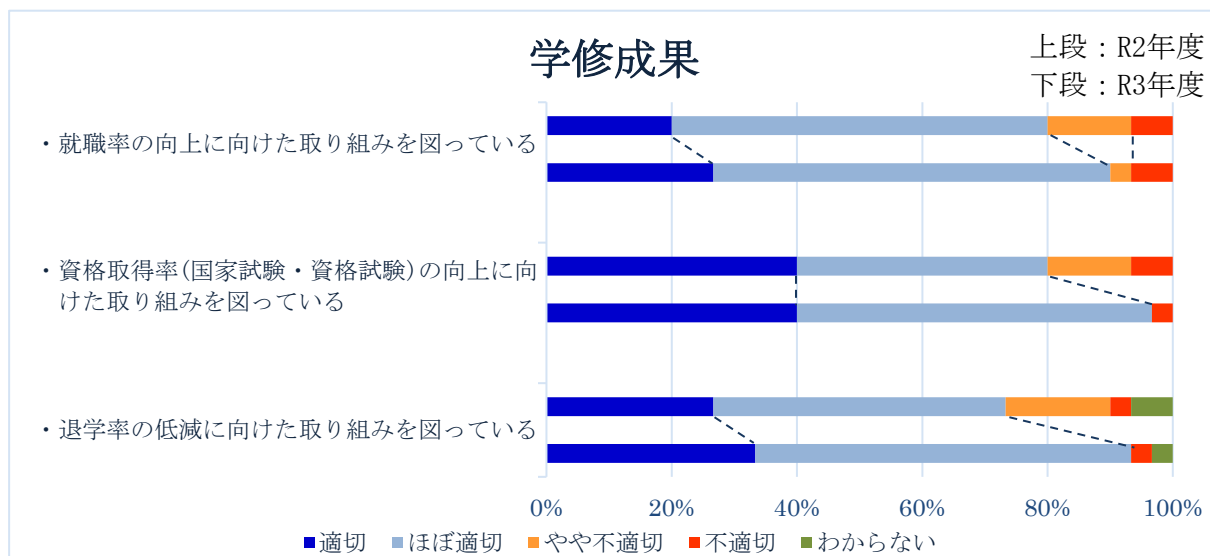
効率化の推進について、更なる発展を期待する。

「教育目的に沿った運営方針」、「学則に基づく運営の明確化」、「組織の整備」、「定期的な会議の開催」項目の「適切」「ほぼ適切」の増加は、教育や実習、各種会議において、教職員の皆さまが試行錯誤しながら取り組まれた成果であると思います。「情報システムによる業務の効率化」では「不適切」「やや不適切」が昨年度より10%高くなっていることについては、更なるシステム化改善が望まれると思います。

コロナにより、かなり学びの場が制限される中で工夫をして教育に取り組んで頂けたと思う。保護者会、保証人会の開催はなかなか難しいとは思いますが学校運営への理解や、学生の卒業後の教育の連携等を考えるとリモートなど今年度は開催を検討頂きたい。

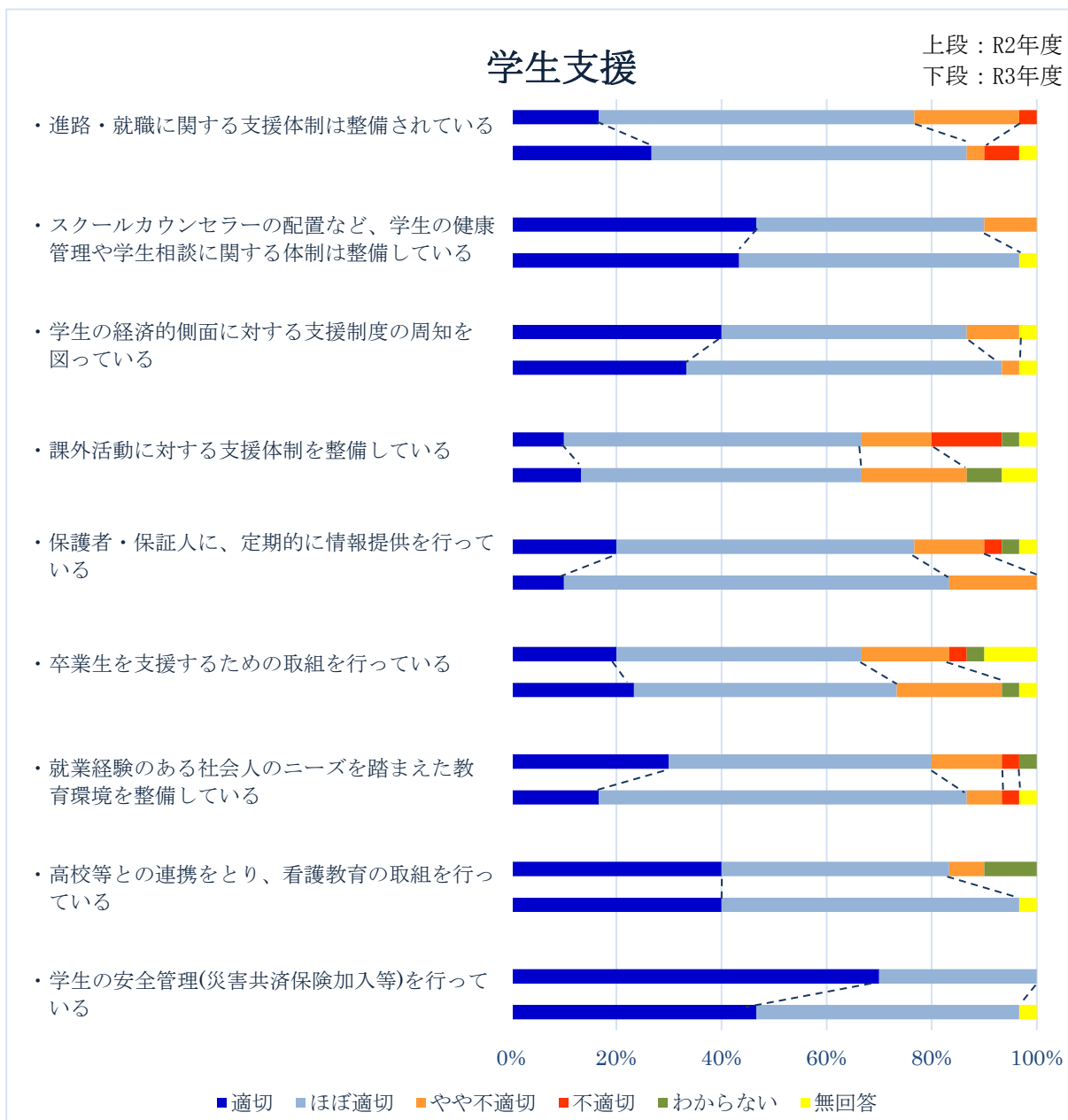
結果より、次年度の目標として教員と事務組織の連携を密にしていくという課題が明確化できているので、課題に対して具体策の抽出を行う事が必要であるといえる。また、教員の事務作業の軽減を図り、学生指導の時間を確保するには早急なシステムの見直しが必要であると考えます。システムの見直し、変更により教員の方々のライフワークバランスの実現につながるのではないかと。

(2) 学修成果



校内評価	外部評価
<p>学修成果について、「就職率の向上に向けた取り組みを図っている」は「適切」「ほぼ適切」が90%で、昨年度より約10%高くなった。医療機関の就職試験は新年度早々から開始されるが、進級前に奨学金貸与も含めて就職状況を把握し担任による面談などを早期から開始していた。しかし、コロナ禍の影響で各施設の募集人員にバラつきがあり、希望する施設への就職が決まらず内定まで時間を要した学生も複数名いた。</p> <p>インターンシップに関してはオンラインで開催されることが多く、昨年度より比較的参加しやすい状況であったと考えられるが、引き続き、コロナ禍での就職活動を支援するために京都府看護協会の就職に関する情報収集や学生への情報提供、タイムリーな面談などが必要である。</p> <p>「資格取得率（国家試験・資格試験）の向上に向けた取り組みを図っている」については、「適切」「ほぼ適切」が97%と、昨年度より約20%高くなった。国家試験・資格試験対策については、全ての課程で模擬試験や対策講座などを計画的に取り入れており、また、これまでの経験を活かして模擬試験の種類や時期を検討し、その結果の分析を行うことでより一層の学生の力量や学習進度に合わせた効果的な対策を取ることができた。ただし、国家試験対策においては学習面以外に精神的なサポートも重要であり、また、入学時から効率的に系統立てた試験対策が必要であることから、次年度は、学年担任だけが負担を抱えることがないように、国家試験対策担当教員の下、全教員が系統的に学生のサポートをするための支援体制を構築する。</p> <p>「退学率の低減に向けた取り組み」は、「適切」「ほぼ適切」が93%と昨年より約20%高くなった。今年度も登校の制限があり学習への不安やオンライン授業が続くことで他者との関わりが不足し、孤独感を感じ退学へとつながったケースも見受けられたが、そのような学生の状況を早期に把握し、担任のみならずスクールカウンセラーと連携し電話相談を行うなど学生の不安に寄り添うことができた。次年度も学生アンケート等を利用し不安の強い学生や気になる学生はスクールカウンセラーと連携を取りながら関わる体制を強化していくと同時に学生の些細なサインを見落とさない信頼関係の構築に努める。</p>	<p>就職率向上及び、資格取得率向上は本学の存在意義に関わる内容であると思われる。特に近年はコロナ禍等の影響で従来の取り組みが困難であると思われるが、それに対応した努力と工夫が感じられる。</p> <p>学修成果について、「就職率の向上に向けた取り組みを図っている」は「適切」「ほぼ適切」が90%で、昨年度より約10%高くなっていることは、進級前に面談を開始されていることの成果であると思います。「資格取得率（国家試験・資格試験）の向上に向けた取り組みを図っている」については、「適切」「ほぼ適切」が97%と、昨年度より約20%高くなっていることについても、模擬試験や対策講座などを計画的に取り入れられた成果であると思います。</p> <p>コロナ禍での就職活動は学生だけでなく、雇用する側も本当に大変である。実習施設と学校と情報共有して就職活動に繋げることもできたらよいと思う。コロナ禍で様々な理由による退学が考えられると思うが、出来るだけ防止できるようにスクールカウンセラーと連携を強化して頂きたい。</p> <p>保護者として、大変満足している。</p>

(3) 学生支援



校内評価	外部評価
<p>9項目中、ほぼ全ての項目で「適切」「ほぼ適切」が増加した。特に「スクールカウンセラーの配置など、学生の健康管理や学生に相談する体制は整備している」は「やや不適切」がなく無回答を除き96%が「適切」「ほぼ適切」となっている。コロナ禍で精神的サポートを必要とする学生も多く、教員が学生の状況を気にかけて適切にスクールカウンセリングにつなげるなどの連携が取れていたものと考えられる。</p> <p>また、「進路・就職に関する支援体制は整備されている」では「やや不適切」「不適切」の割合が昨年度の約25%から10%に大幅に低くなった。しかし、「不適切」のみに着目すると昨年度よりも増えている。これは、就職に関しては最高学年を担当している教員の負担が大きいためと考えることから、今後、就職に関する相談窓口を設置し、専属の教員が担当するな</p>	<p>学生への支援体制については、全体的に良好であると感じられる。しかし、「進路・就職の支援体制」については、若干の課題があることがうかがえる。一人一人の学生に対する支援体制の構築を期待する。</p> <p>ほぼ全ての項目で「適切」「ほぼ適切」の増加について、コロナ禍で教員が学生の状況を気にかけて適切にスクールカウンセリングにつなげるなどの連携が図れていた成果であると思います。就職に関する最高学年担当教員の負担軽減については、校内評価の通り支援体制の充実が必要であると思います。</p> <p>国家試験合格 100%の達成をよろし</p>

どの支援体制が必要である。

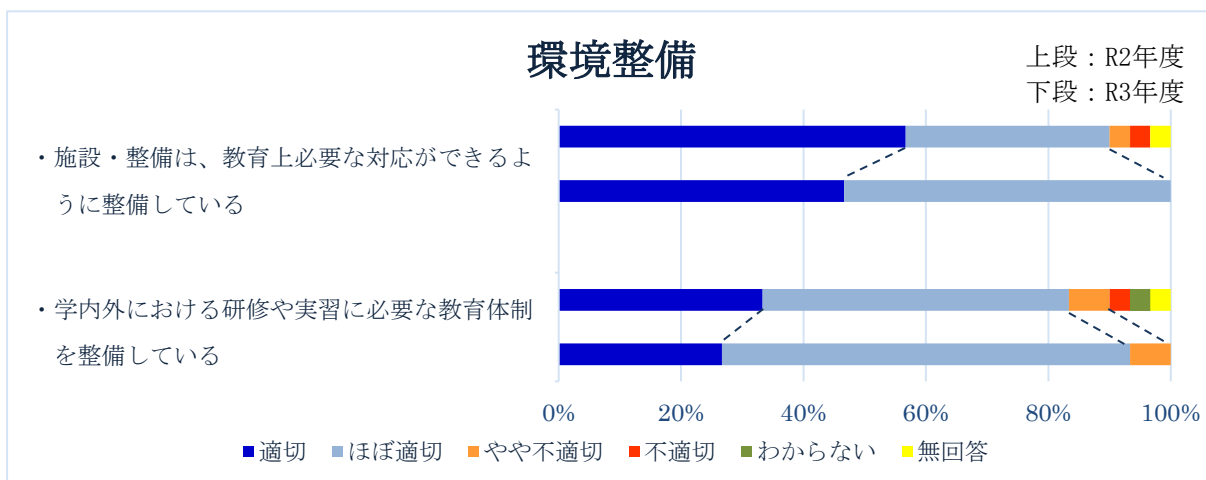
「保護者・保証人に、定期的に情報提供を行っている」は「適切」「ほぼ適切」の割合が高くなっており、「不適切」は0%であった。昨年度に引き続き、コロナ禍の影響で保証人会の開催はできていないが、次年度以降は従来の来校型の保証人会に加え、オンラインによる面接や誌面、ホームページを活用するなど学生の状況を適宜情報提供できる場を検討していく必要がある。

「学生の経済的側面に対する支援制度の周知を図っている」は「適切」「ほぼ適切」が昨年度に続き90%台と高く、学生ポータルへの活用による学生への情報提供の効果がみられる。また、何らかの給付金や奨学金等による支援を受けている学生の割合も高い。今後もコロナ禍で経済的に困窮する学生が想定されるため引き続き経済的支援に関する情報提供を行うとともに、職業訓練給付金の対象校として継続できるよう引き続き退学率の低下、国家試験の100%合格を目指していく。全体的に無回答は減っているが、入職間もない教員には意図的に伝える必要がある。

くお願いします。就職活動、支援が担任の先生が担うのは業務的にも難しい状況と思われるので、専属の教員は必須である。

スクールカウンセラーの配置を行っており、教員がサポートの必要性を感じた学生に対してカウンセリングに繋げるなど、学生のメンタルへのフォローが行えており有益な学生支援が行えている。

(4) 教育環境
ア 環境設備



校内評価	外部評価
<p>「施設・設備は教育上必要な対応ができるように整えている」では「適切」「ほぼ適切」が100%であった。</p> <p>今年度も、オンライン授業に関する対応として、校内全館にWi-Fiを整備し、自宅のオンライン環境が不十分な場合だけでなく、学内実習や演習においてもオンライン方式で対応する頻度が増加したため、ipadを含めた効果的な活用を進めている。さらに、オンライン授業に関する課題対応のため、Webカメラの利用をはじめ、スクリーンやスピーカー、マイク等の定期整備を実践している。</p> <p>また、感染防止を考慮した教室使用については、体育館や合同教室の1教室対応だけでなく、複数教室を使用した対面方式・オンライン方式での同時授業を行った。実施にあたっては学生への平等性を考慮し、対面教室と</p>	<p>施設・環境及び、研修や実習に必要な教育体制の整備については、ICT環境充実が、昨今の社会状況や学生ニーズに則したものであることがうかがえる。</p> <p>「施設・設備は教育上必要な対応ができるように整えている」の「適切」「ほぼ適切」が100%と十分な対応ができています。感染防止の考慮においても状況に応じた対応を実践されていると思います。</p> <p>環境を整え、オンライン授業など多彩な教育体制をとり教育に当たって頂いたと思う。しかし、看護には対面で</p>

オンライン教室を適宜入れ替えとした。
上記の取組により、第5波、第6波の状況を臨機応変に対応することができた。

「学校外における研修や学習に必要な教育体制を整備されている」では、昨年度は、「やや不適切」「不適切」「わからない」「無回答」が16.6%であったが、今年度は、否定的な回答は激減し「適切」「ほぼ適切」の割合が93%となった。課外授業の多くは、昨年度と同様、やむを得ず中止・延期となったが、ICT環境下で学内授業は概ね計画通り進められた結果であると思われる。

学内での学習環境としては、学生からの要望の多かった学習室や図書室利用は感染防止対策のルールを徹底しながら計画的に開放した。飲食時の感染が危惧される学生ホールは、一人学習のみの利用に限り、以前のような談笑をしておける学習や軽食可とした利用には至っていない状況である。

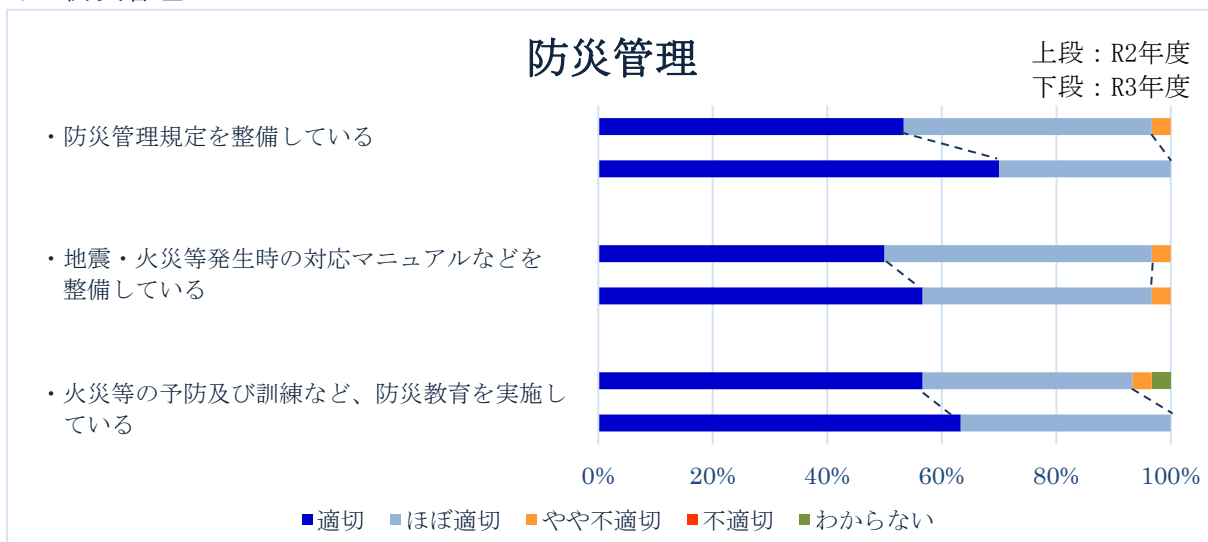
教員についても、今年度、学内の研修会や講演会にオンラインを活用し実施することができた。学外の研修もほとんどがオンライン研修となり、多くの教員が参加することができた。

2項目とも肯定評価が増えたが、高度で複雑なICT活用については課題が残るため、今後、ICTを用いた授業や演習についてリーダーシップがとれる専属の教員を中心に知識・技術を高めるよう研鑽していく。

しか学びを深めることが出来ない事もあり、これからの教育の在り方が実際の看護にどのような影響が出てくるのか不安にも思う。

コロナ感染が広がるなか、ICT環境の整備をはかり、学内でのクラスターの発生がなく現在に至っており大変満足している。

イ 防災管理



校内評価	外部評価
<p>今年度、「防災管理規定を整備している」「地震・火災等発生時の対応マニュアルなどを整備している」「火災等の予防及び訓練など、防災教育を実施している」全てにおいて、「適切」「ほぼ適切」が100%を占め、かつ「適切」が「ほぼ適切」を上回った。</p> <p>今年度は、昨年度中止となった教職員対象の防災訓練や学生対象の訓練を実施した。実施に際して、感染防止の徹底の観点からも、複数回全体会議にて周知を図った。</p>	<p>自然災害の増加傾向が感じられる昨今、施設の防災管理や対応マニュアルの整備は必須である。特に、職種の特殊性を考慮すれば、防災教育の徹底は欠かせないものと感じる。</p> <p>全ての項目で「適切」「ほぼ適切」が100%を占め、教職員対象</p>

又、学生の意識付けにあたり、専任教員が高い意識で準備に臨んだ結果と考える。

また、連絡方法・発災時の安否確認の手段であるポータルサイトの利用が習慣化されてきており、教員・学生共に発災時の役割や行動についての認識を含め、防災意識の醸成につながっていると思われる。

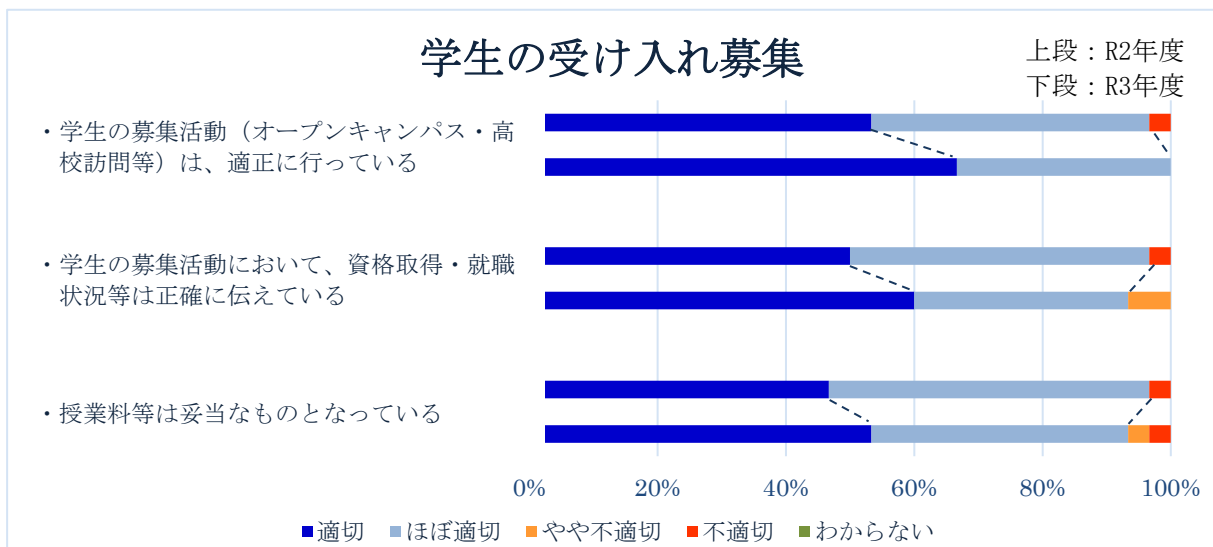
本校が指定されている妊産婦等福祉避難所に関する訓練は、京都市からの依頼時期に対応できないため見送りとなったが、次年度は教職員への周知を徹底し訓練も実施していく必要がある。

の防災訓練や学生対象の訓練を実施され、専任教員が高い意識で準備に取り組まれた成果であると思います。

コロナ禍ではあるが、防災訓練については継続して取り組んで頂きたい。

防災に対するマニュアルの整備を実施し教員の防災訓練を開催されており満足している。

(5) 学生受け入れ募集



校内評価	外部評価
<p>「学生の募集活動（オープンキャンパス・高校訪問）は、適正に行っている」に関しては、「適切」「ほぼ適切」が100%であった。</p> <p>今年度のオープンキャンパスは、コロナ禍において、感染防止対策を徹底した上での運営を工夫し、2回の来校型、3回のWeb方式の計5回の実施ができた。参加者は、398名と昨年度より15%減少したがWeb方式であったことから全国からの参加者があった。恒例の在校生による校内案内はできなかったが、Web方式では、在校生や卒業生の座談会等、各回異なった取り組みを実施した結果、参加者の高い満足度が得られ、受験候補校として高い評価が得られた。</p> <p>広報活動は、各種広報媒体への投稿を実施した。併せて、コロナ禍の状況を踏まえた形式で高校訪問を実施した。オープンキャンパス参加者の79%がHP、7%が教員からの勧めが参加のきっかけと回答したことから今後も地道な広報活動が有用であることが確認できた。</p> <p>来校による公開授業では東稜高校、出張授業に八幡高校、木津高校、洛水高校、京都すばる高校へ教員が出向いた。高校訪問とあわせて、助産学科におい</p>	<p>コロナ禍の状況は予測がつかず、広報活動は困難を極められると思われるが、Web方式等を導入して適切に進められている。更に「選ばれる学校」となるよう期待する。</p> <p>「学生の募集活動（オープンキャンパス・高校訪問）は、適正に行っている」に関しては、コロナ禍の状況に応じた工夫がされ、着実に実施に向けた活動に取り組まれた成果であると思います。教職員の熱意と活動への工夫が伝わるPRを継続して頂きたいと思います。</p> <p>コロナ禍ではあるが、オープンキャンパスは在校生と触れ合う時間などの確保は必要と思う。学生を確保するためにも、感染対策を講じて出来る限り以前のようなオープンキャンパスを取り組んで頂きたい。</p> <p>大変満足している。</p>

ては看護師養成校へのアプローチも必要である。今後も印象に残り「選ばれる学校」となるよう工夫した広報活動を実践していきたい。また、高校生・看護学生、社会人のニーズを分析し参加しやすい開催時期・方法を検討していきたい。

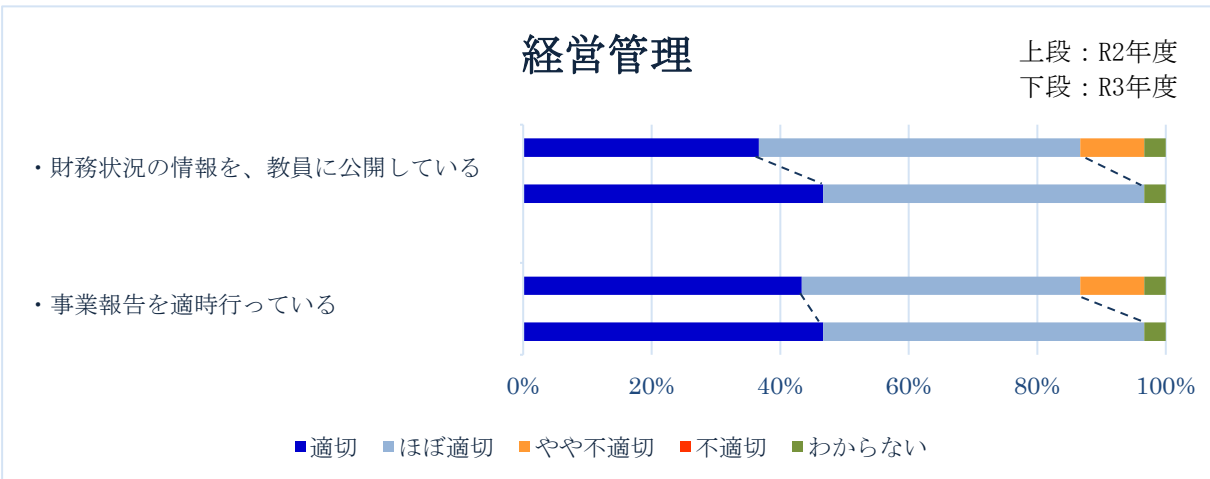
「資格取得・就職状況などは正確に伝えている」「授業料は妥当なものとなっている」に関しては、「適切」「ほぼ適切」が昨年度より約4%ほど減少し、全体で93%であった。「資格取得・就職状況などは正確に伝えている」については、HPへの掲載やオープンキャンパスでの説明といった取り組みに教員の参加を促し、学校全体で受験生への関心を高めたい。

「授業料は妥当なものとなっている」に関しては、自信をもって教育を実践していける学校・教職員であるよう、引き続き尽力していきたい。

今後は、2年課程の閉課程に伴い、看護学科3年課程と助産学科の2学科となるため、より魅力的な学校作りを目指すべく、本校の魅力の一つである、職業実践専門課程やキャリア形成促進プログラムの認可のPRを今後も積極的にアプローチし、学生獲得に努めたい。

(来校型：178名45%、Web方式220名55%)参加者全体数は減少したが、多数を占めた。(看護学科:Web参加率17%、助産学科:Web参加率66%)

(6) 経営管理
ア 財務

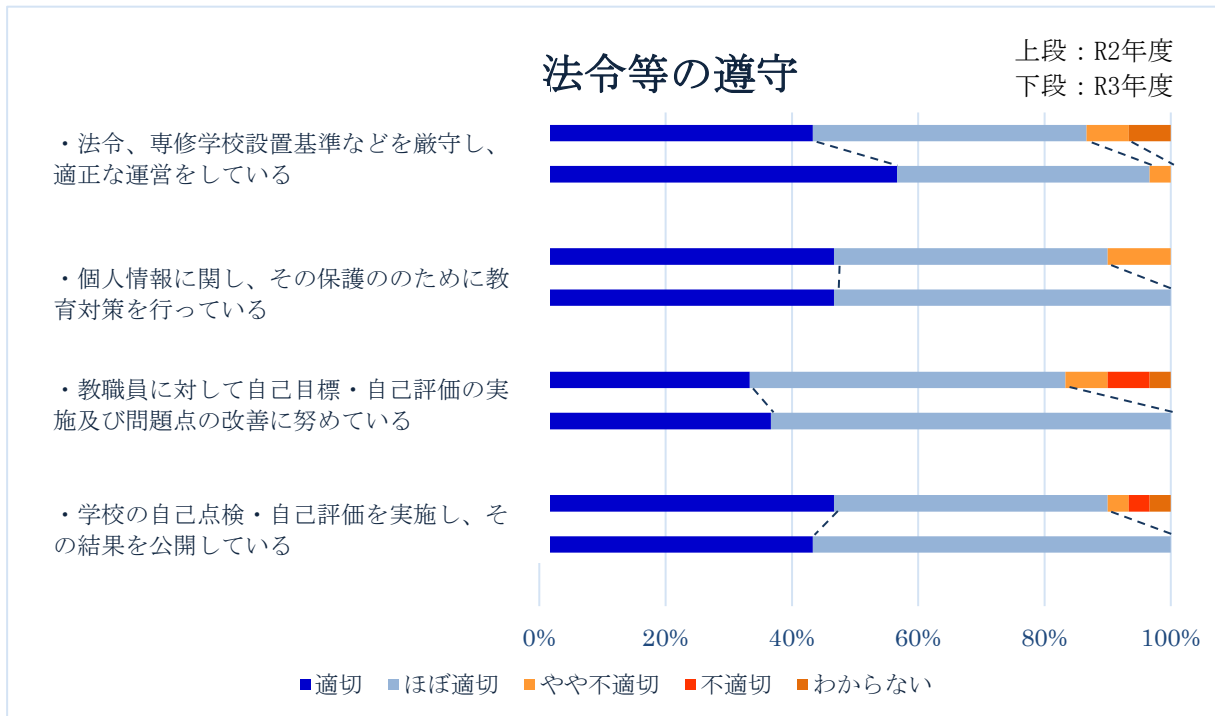


校内評価	外部評価
<p>「財務状況の情報を、教員に公開している」、「事業報告を適時行っている」において「適切」「ほぼ適切」が昨年度より大幅に上回っている。昨年度からこれまで以上に財務状況を詳細に報告し、学校の現状と将来構想を明らかにした結果であると考えられる。</p> <p>また、今年度からは、教職員が出席するほぼ全ての会議において、機会あるごとに財務状況と今後の展望等について説明してきた。</p> <p>令和3年度末で准看護科が、令和4年度末には2年課程が廃止されるが、今後は将来の少子高齢化を見据</p>	<p>詳細な情報公開、情報共有がなされていることが分かる。油断せずに継続をお願いしたい。</p> <p>「財務状況の情報を教員に公開している」、「事業報告を適時行っている」で「適切」「ほぼ適切」が大幅に上回ったことについて、学校の現状と将来構想を明確にされた結果であると思います。</p> <p>意見なし。</p>

えた学校運営が大切になるため、今まで以上に事業報告を積極的に行い、全教職員が現状把握に努めるとともに、学校の将来構想についても当事者の一人として、意識を共有する必要があると考える。

自己点検、自己評価を行い適切に管理している。

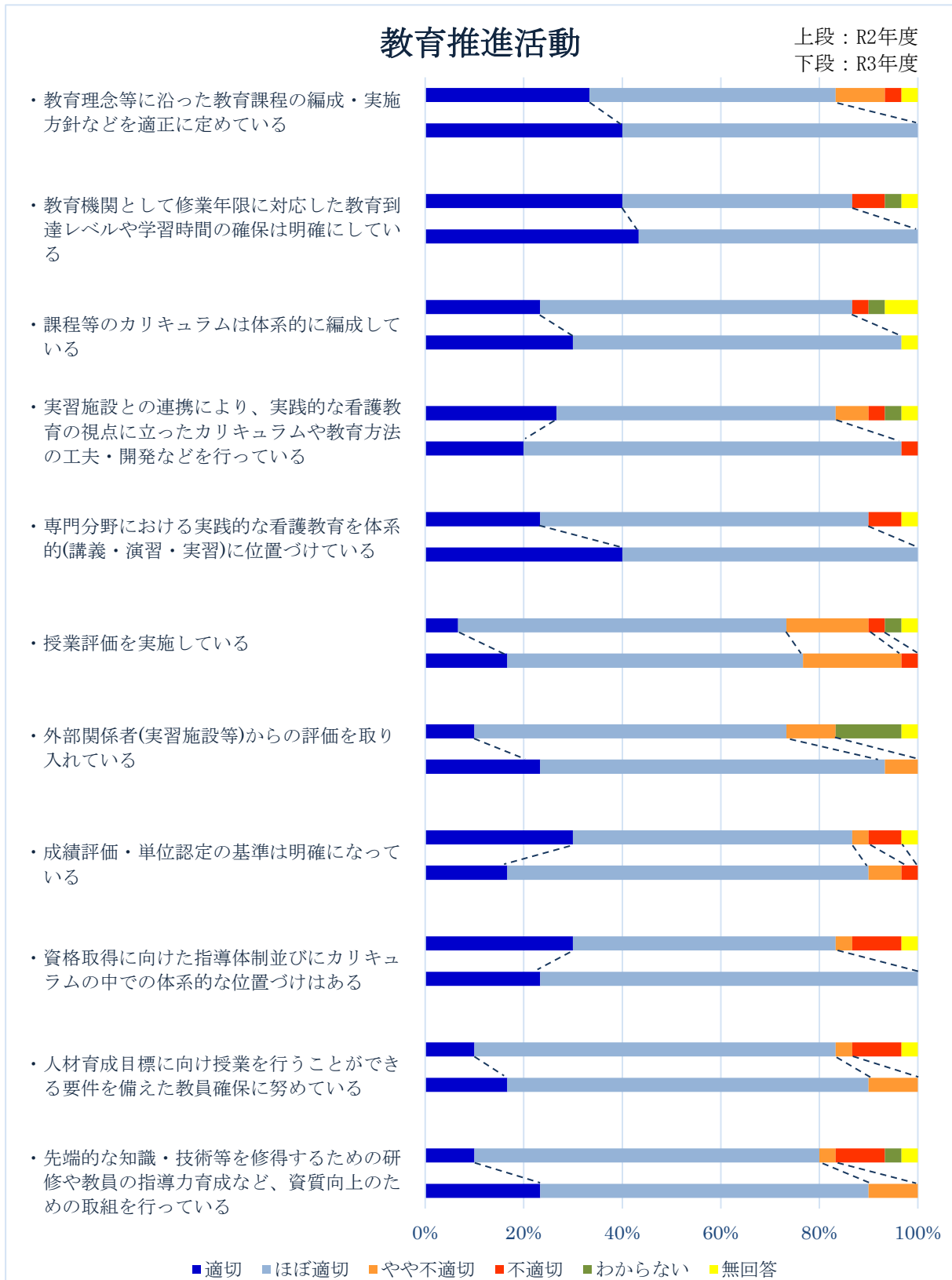
イ 法令遵守



校内評価	外部評価
<p>ほぼ全ての項目で「適切」「ほぼ適切」となった。本年度は、個人情報の取り扱いについて合同会議で周知を図ったり、弁護士から研修を受けるなど個人情報の取り扱いについて全職員で学習した。</p> <p>毎年4月に教員個人の自己目標を立て、年度末に自己評価を行っているが、年度途中での見直しも含めて、自己目標・評価が形骸化しないような仕組みを考える必要がある。また、学校の自己点検・自己評価も毎年実施しており、自己点検をした集計および総括は、毎年2回学校関係者評価委員より点検を行っていただき、学校運営にいかすことができている。</p> <p>今後も引き続き健全な学校運営に向けて、法令を遵守するとともに自己点検・自己評価による見直し、改善を進めていく。</p>	<p>適切な運営・対策・改善が感じられる。教育機関として、更なる信頼性構築のためにも引き続き適切な対応をお願いしたい。</p> <p>ほぼ全ての項目で「適切」「ほぼ適切」となった。合同会議や弁護士からの研修受講などを全職員で学習された成果であると思います。学校の自己点検・自己評価の実施では、集計および総括の結果や課題について見直しや改善への取り組みが見える化できており素晴らしいと思います。</p> <p>意見なし。 大変満足している。</p>

Ⅲ. 教育活動

(1) 教育推進活動

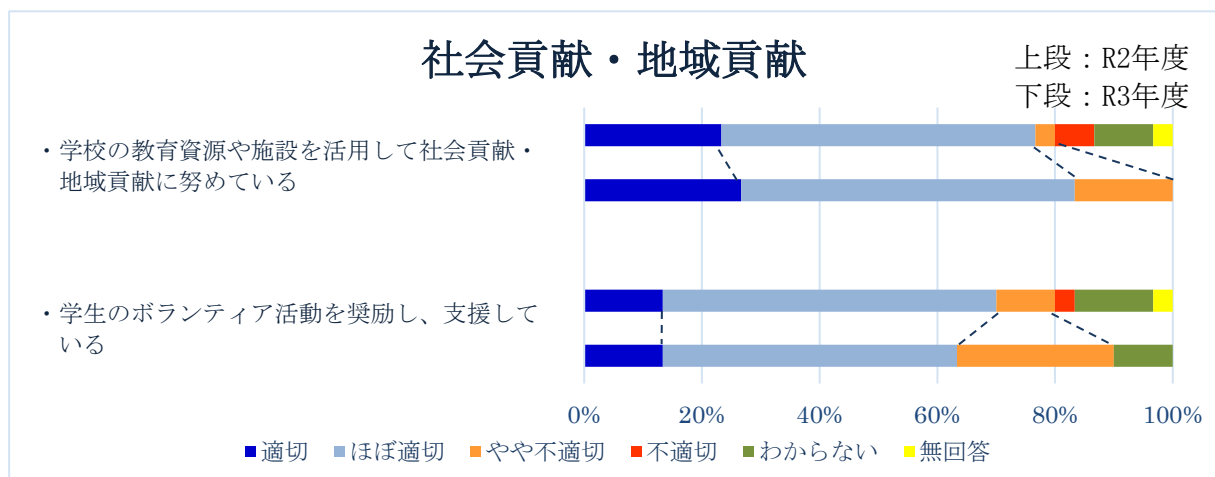


校内評価	外部評価
<p>全ての項目において「適切」「ほぼ適切」の割合が高くなった。これは、新カリキュラム開発に向けて全職員がアドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを明確にし、教育理念、教育目的・教育目標を再認識</p>	<p>全ての項目において、昨年度よりも良好な結果であることは、職員の皆さんの日々の努力が結実したものであると思います。今後も、一人一人</p>

した結果だと考える。
特に「実習施設との連携により、実践的な看護教育の視点に立ったカリキュラムや教育方法の工夫・開発などを行っている」「専門分野における実践的な看護教育を体系的(講義・演習・実習)に位置づけている」では、「適切」「ほぼ適切」が大幅に増加した。これは、コロナ禍における看護基礎教育も2年目を迎え、学びの機会が制限される中でもオンライン授業や学内代替実習の方法を工夫して学習目的、学習目標の達成が可能となるよう教育活動を行った成果であると考えられる。実習施設との連携においては、コロナ禍による実習受け入れの中止や実習内容の制限があるため、引き続き実習施設と密に連携を図りながら、学生に不利益が生じないよう教育内容を精選していきたい。
「授業評価を実施している」「成績評価・単位認定の基準は明確になっている」では横ばいの結果であり今後の大きな課題の一つである。評価基準等は今年度大幅に見直しをしたため、次年度は各領域における具体的評価基準等を明確にし、運用していく必要がある。

の学生に寄り添った教育の推進をお願いしたい。
全ての項目において「適切」「ほぼ適切」の割合が高くなったと共に「わからない」評価がなくなったことは、教育推進活動が教職員に周知され実行されている成果であると思います。医療現場での実習では、厳しい状況が続く中、校内実習で教職員が工夫されていることがこの成果に繋がっていると思います。
コロナ禍であるので、より一層実習施設と学校との連携強化が必要と感じる。成績評価・単位認定の基準の明確化は、R1年から毎年評価が下がっている。今年度、見直したという事であるが教育機関としてはこの項目は改善が必要と思われる。
大変満足している。

IV. 社会貢献・地域貢献・国際交流



校内評価	外部評価
<p>「学校の教育資源や施設を利用して社会貢献・地域貢献に努めている」については「適切」「ほぼ適切」が80%を超え昨年度より上回った。今年度も校内への立ち入り制限もあり、看護学科と地元高校との連携授業である実習が2年連続中止となったが、緊急事態宣言が解除された期間は積極的に分野別模擬授業に出向くことができた。助産学科の高校での性教育も、今回は高校に出向いて開催することができた。</p> <p>ボランティア活動は今年度も地域の行事が中止となるなど、参加の機会がなかった。また、学生に行動制限を課していたこともあり、ボランティア活動を積極的に促すことができなかった。</p> <p>(今年度の活動は以下の通り) 次年度は新型コロナウイルスの感染状況を鑑みな</p>	<p>ボランティア活動の奨励はコロナ禍のため困難であるが、その中でも、できる限りの社会貢献・地域貢献の活動を進めていることは素晴らしいことである。</p> <p>「学校の教育資源や施設を利用して社会貢献・地域貢献に努めている」については「適切」「ほぼ適切」が昨年度より上回ったことについて、感染拡大状況で実施に至らなくても、そこに意識をもって活動されていることが周知されているのだと思います。</p> <p>コロナ禍でありこのような結果は仕</p>

<p>がら、教員も学生も地域や社会貢献につながる活動を実施していきたい。</p>	<p>方がないと思う。昨年度もお伝えしたが、助産学科だけでなく、看護学科でもコロナ禍だからこそ何かしらの取り組みを行って頂きたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 貢献・国際交流 大変満足している。 ・ 社会貢献・地域貢献 自主性・主体性を大切にしたいボランティア活動を支援されており、大変満足している。
--	---

1. 社会貢献

【京都府立東稜高等学校】

ライフサポートコース出張看護体験授業 12月14日(火)

浏览美佐江・松井いづみ・秋山寛子

【京都府立洛東高等学校】

性教育実践 2月17日(木) 助産学科13期生 橋戸好美他

【滋賀県看護協会】

滋賀県専任教員養成講習会受け入れ2名 10月5日～10月22日

【関西広域連合】

准看護師研修の受け入れ 1名 2月14日～25日 3月14日～29日

【講師派遣】

株式会社学研メディカルサポートオンラインシミュレーション講義

テーマ：転倒・転落

北西富恵

テーマ：多重課題②ハプニングへの対応

北西富恵

医学書院 看護基礎教育支援プラットフォームNEO 第2回シミュレーション広場発表

北西富恵

【分野別模擬授業（看護専門学校）】

京都府立洛東高等学校2年生 11月5日(火)

秋山寛子

京都府立木津高等学校1年生 11月17日(水)

秋山寛子

京都府立京都すばる高等学校2年生 11月22日(月)

橋戸好美

【学会/職能関係】

京都母性衛生学会理事・副編集委員長

秋山寛子

京都府看護協会選挙管理委員

秋山寛子

京都府看護協会推薦委員

橋戸好美

京都府看護協会総会協力委員

守屋嘉奈子

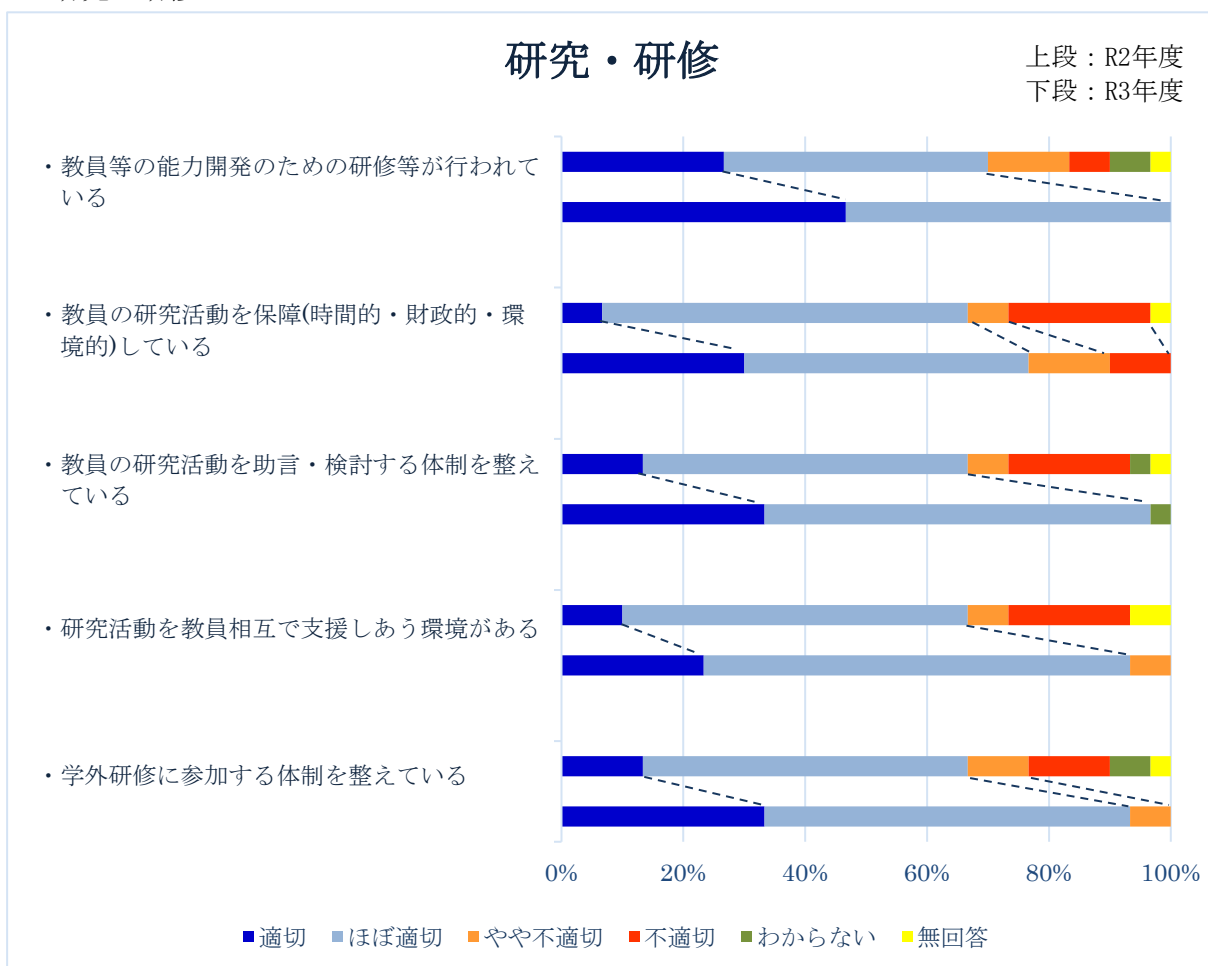
山科保健センター運営協議会委員

秋山寛子

京都府立洛東高等学校運営協議会委員

秋山寛子

V. 研究・研修



校内評価	外部評価
<p>全ての項目において、肯定評価となっている。今年度も、積極的にオンライン研修への参加を促した。教員研究においては、京都看護大学の豊田教授による指導のもとに取り組み、発表は、オンラインとなったが、全教員が発表するなど、積極的に教育能力開発に努めた。(詳細は、以下の通り)</p> <p>次年度も有料のみならず、無料のオンライン研修も増えることが予測されるため、教員、事務職員にも積極的に参加を呼び掛けるとともに、引き続き、研究活動のための時間、財政、環境については保障していく必要がある。</p>	<p>積極的な研修・研究活動が進められていることが感じられます。そのことが、「教育推進活動」の充実につながっているものと思われます。更なる修養と研鑽を期待いたします。</p> <p>全ての項目において、肯定評価となっていることは、オンライン研修への参加や京都看護大学の豊田教授による指導・取り組みで全職員発表されるなどの取り組み成果であると思います。</p> <p>教育の現場と、臨地の現場とで学びを共有できるような取り組みが出来たらよいと思う。</p> <p>ラダーシステムを導入され教育に対し力を注がれており大変満足している。</p>

【学校内】

新人教員研修	4月1日～7月6日 6日間 4名
研究授業	令和3年4月～令和4年3月 1名
公開授業	令和3年4月～令和4年3月 2名

シンポジウム 12月24日(金)

テーマ：新カリに向けて京都府医師会看護専門学校の未来について語ろう
基調講演 教員のありよう～心ある看護師・助産師の育成を目指して～角井教育顧問
看護学科8領域および助産学科が発表した。

研修会 6月19日(土)

「看護教員に必要な法律の知識」 アクシス法律事務所 弁護士 廣石阿津沙先生
12月24日(金) 日本看護学校協議会学会に参加して 澤田 恵里
3月23日(木) パソコンに関する基礎と応用

研究発表 3月24日(金)

コメディカル参加型学内代替実習における学習効果	井上 理子他
重症心身障害児施設実習における学生の困難感の検討	白木 紀代美他
分娩介助技術試験後の学生アンケートからみえたもの～緊張に着目して～	守屋 嘉奈子他
臨床判断能力育成に必要な気づきの実態調査	堀内 美希他
本校看護学生の SNS 利用の実態調査	中嶋 淳子他
本校の事前学習の認識に対する学生の実態調査	新井 静香他
学生と教員との評価におけるずれ	石田 孝子他

【学校外】

1. 学会発表

8月3日～4日 日本看護学校協議会学会 山形県 口演発表
周術期看護実習における代替実習の効果と課題 ○ 澤田 恵里・井上 理子・高橋 達夫

2. 学会・研修会等参加

7月24日(土) 京都母性衛生学会学術集会 京都(オンライン)
講演 「精神科医の立場から考える周産期メンタルヘルス」 講師 金井 講治先生
参加者 橋戸好美・守屋嘉奈子・井上沙織

8月18、19日 日本看護学教育学会 第31回学術集会 オンライン開催
テーマ COVID-19 危機から学ぶ看護学教育のグローバルイノベーション
会長 池松 裕子 参加者井上沙織

3月20日 第35回 日本助産学会学術集会 オンライン開催
テーマ 助産師として生きる～改革と挑戦～ 会長 高田 昌代
参加者 井上沙織

第1回シミュレーション教育研究会 北西富恵
第2回シミュレーション教育研究会 北西富恵

【長期研修】

公益社団法人滋賀県看護協会 令和3年度 滋賀県専任教員養成講習会
5月11日～11月25日(滋賀県) 2名

【短期研修】

- ①6月6日 公益社団法人 日本産婦人科医会 第6回母と子のメンタルヘルスフォーラム in Fukuoka 1名
- ②7月5日～7月26日 公益社団法人 日本産婦人科医会 第43回性教育指導セミナー全国大会 in Okinawa 2名
- ③8月26日 京都府看護協会研修センター 子どもの発達障害～コロナウイルス感染症影響を考える 1名
- ④9月2日 京都府看護協会研修センター 魅力的なファシリテーターになるためにスキル・マインドを学ぼう! 1名
- ⑤9月22日 京都府看護学校協議会 ICT を活用した授業実践アラカルト～教員の試行錯誤から～ 5名
- ⑥10月29日 京都府看護協会研修センター ベストタイミングを逃さない報告のコツ 1名
- ⑦10月8日 京都府看護協会研修センター レジリエンス・ストレスと上手に向き合う～折れない心の作り方～ 2名

- ⑧10月14日 京都府助産師会 多胎等育児支援事業（えんどう豆の会）
口唇口蓋裂児の支援者向け研修会 1名
- ⑨11月9日 京都府看護協会研修センター 忙しさの中からの脱出～段取り力を高める
看護管理～ 2名
- ⑩11月12日 京都府看護協会研修センター 病棟ナースが知っておきたい在宅療養の実
際 2名
- ⑪11月30日 京都府看護協会研修センター 高齢者の生活を支える～フレイルの視点か
ら～ 2名
- ⑫12月3日 京都府看護協会研修センター 学ぼう！家族看護のあり方 3名
- ⑬12月9日 京都府看護協会研修センター がん看護～がん患者のセルフケア支援を学
ぼう～ 2名
- ⑭12月10日 日本看護学校協議会 中堅専任教員の教育実践能力の強化～ICT
を活用した授業設計～ 1名
- ⑮12月14日 京都府看護協会研修センター 産後うつと自殺 1名
- ⑯12月16日 日本看護学校協議会 副学校長 教務主任会 1名
- ⑰1月12日 京都府看護協会研修センター 実践の中にある看護倫理～倫理的ジレンマ
を考える～ 2名

3. 論文・執筆等

日本看護学校協議会学会誌「周術期看護実習における代替実習の効果と課題」

澤田 恵里・井上 理子・高橋 達夫